

国際シンポジウム「ナクバとヒロシマ——記憶とその継承」関連写真展

# ナクバの記憶／パレスチナの現在

広河隆一、古居みずえ、パレスチナの子どもたちによる写真展



1948年のイスラエル建国の際に、おびたがしいパレスチナ人が虐殺されたり、故郷を追われて難民化したりしました。パレスチナ人が「ナクバ（大惨事）」と呼ぶこの出来事からちょうど60年が経つのを機に、ここ広島で、ナクバの記憶とヒロシマの記憶を対話させる国際シンポジウム「ナクバとヒロシマ——記憶とその継承」（2008年12月14日／広島市まちづくり市民交流プラザ・マルチメディアスタジオ：詳細裏面参照）が開催されます。本写真展は、このシンポジウムに合わせ、ナクバの傷跡が今も生々しいばかりか、ナクバを起源とする暴力にさらされ続けてもいるパレスチナの状況とそこに生きる人々の姿を、多くの方に伝えようと開催されるものです。

ナクバから60年の今年、自身の取材経験をもとにパレスチナ問題の根源に迫ろうとする記録映画『パレスチナ 1948・NAKBA』を発表した広河隆一、記録映画『ガーダ——パレスチナの詩』によってパレスチナ人女性の生きざまを伝えた古居みずえの二人は、フォト・ジャーナリストとしてパレスチナに入り、そこに生きる人々に寄り添いながら、カメラの眼を通して、パレスチナで起きていることを追いつけています。本写真展では、そうした二人の現地での取材活動の一端を伝える写真とともに、現在も封鎖が続き、きわめて厳しい生活を強いられているガザ地区の子どもたちにカメラを持たせて撮られた写真のシリーズ「鳥になれたら」が展示されます。



撮影：広河隆一／記録映画『パレスチナ 1948・NAKBA』（広河隆一監督作品）

**開催期間：**2008年12月11日（木）～14日（日）10:00～18:00

**会場：**広島市まちづくり市民交流プラザ4階ギャラリーB

**入場無料**

主催：大学共同利用機関法人・人間文化研究機構（NIHU）地域研究推進事業イスラーム地域研究

共催：広島市立大学国際学部、広島・中東ネットワーク

協力：特定非営利法人・パレスチナ子どものキャンペーン

お問い合わせ：広島市立大学国際学部柿木研究室（TEL.&FAX: 082-830-1767）

## 国際シンポジウム「ナクバとヒロシマ」のご案内

### ナクバとヒロシマ

——記憶とその継承——

NAKBA and HIBAKU: Dialogue between Palestine and Hiroshima

基調講演：ローズマリー・サーイグ (Rosemary SAYIGH)

パネリスト：鶴飼哲 (一橋大学)、直野章子 (九州大学)

趣旨説明：宇野昌樹 (広島市立大学)

日時：2008年12月14日(日) 13:00～17:00

会場：広島市まちづくり市民交流プラザ 6階マルチメディアスタジオ

広島市中区袋町六丁目 36番 / URL: <http://www.hitomachi.city.hiroshima.jp/m-plaza/>

**入場無料** (下記の申し込み受付に葉書かEメールでお申し込みください。)



葉書でのお申し込み：〒731-3194 広島市安佐南区大塚東三丁目4番1 広島市立大学国際学部宇野研究室

Eメールでのお申し込み：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域研究センター

E-mail: [nakba2008@kias.sakura.ne.jp](mailto:nakba2008@kias.sakura.ne.jp) (件名を「国際シンポジウム広島来聴申し込み」としてください。)

(12月7日を締め切りとし、先着100名まで受け付けます。)

主催：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 (NIHU) 地域研究推進事業イスラーム地域研究

※本シンポジウムは、NIHU イスラーム地域研究プロジェクト国際シンポジウム「ナクバから60年——パレスチナと東アジアの記憶と歴史」の一環として開催されます。

共催：広島市立大学国際学部、広島・中東ネットワーク

お問い合わせ：広島市立大学国際学部宇野研究室 (TEL&FAX: 082-830-1769)

国際シンポジウム「ナクバから60年」Website: <http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/kias/nakba2008/>

### 「ナクバ」とは

1948年5月、突然襲いかかってきた暴力により、パレスチナ人は故郷を追われることになった。中東の一角で、それまで平和に暮らしていた人々の生活は破壊され、家族は引き裂かれた。ヨーロッパにおけるユダヤ人差別の問題を押しつける形で、この地にイスラエルが建国された結果である。パレスチナ人はユダヤ人に代わって世界中に離散し、難民生活を送ることとなった。それから今年で60年が経つ。

「ナクバ」とは、パレスチナ人を襲ったこの離散による悲劇を表すアラビア語である。故郷における共同体は分断され、滞在先で支えあう小さな集団へと形を変えた。人々が生まれ育った家の多くは破壊され、400以上の村が廃墟となって放置されたままだ。当時80万～100万人とされる人々が、ヨルダン川西岸地区やガザ地区、周辺アラブ諸国などへ逃れたが、彼らの大半はその後、帰還を許されることもなく現在に至っている。

「ナクバ」はイスラエルとパレスチナの間紛争の出発点である。イスラエル人にとっての独立記念日はパレスチナ人にとって苦難の記念日となった。難民生活は二世、三世目を迎え、故郷の地を知らない子どもたちがパレスチナ人という呼称を受け継いでいる。離散にあたってはパレスチナ人居住地の各地で虐殺が行われ、財産が没収された。問題の解決には、これら全ての補償が検討の対象に含められる必要がある。それを待つ間、重要な取り組みとして求められているのは、記憶を語り継ぐ作業である。実際にパレスチナの故郷を知り、「ナクバ」を体験した人々の多くは既に高齢に達している。

常に勝者によって綴られる歴史の中で、埋没しがちな紛争の犠牲者の足跡を記すことの意義は、パレスチナだけに当てはまるものではない。被害者に委ねられた「語り継ぐ」という行為のもつ重みは、ヒロシマにおける被爆の体験にも共通するものだろう。遠く離れた中東の地で起きたパレスチナ人にとっての悲劇は、わたしたちにとっても重要な示唆をあらわすと考えられるのである。

(錦田愛子/東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)